

発明家であった工楽松右衛門はその技術力で地元高砂にもつくした

本日の神戸新聞に「工楽家文書調査報告、土木技術 まち整備にも」という記事が載った。この記事のポイントは次のようである。

工楽(くらく)家が培った高い土木技術が新田開発や港湾整備などの兵庫県高砂のまちづくりに生かされていた。その経緯が今回の調査で初めて明らかとなった。現在のカネカ高砂工業所一帯の海を姫路藩の命を受けて1817年から約10年かけて埋め立て、新田開発を行った。高砂の港の整備も進め、工楽家は3代にわたってまちの整備につくした。

神戸新聞 2019年6月6日

(第3種郵便物認可) 新 戸 報

高砂出身・江戸時代に丈夫な帆布発明

松右衛門 築港の第一人者

江戸時代に丈夫な帆布を発明し、海運業に貢献した高砂出身の工楽松右衛門が、全国各地の港湾整備を手掛けた築港の第一人者だったことが5日、高砂市教育委員会の調査で分かった。松右衛門が整備した港の絵図複数枚が見つかったほか、函館で造成した港湾施設を淡路出身の豪商高田屋嘉兵衛に譲っていたことを示す資料を確認。市教委は、松右衛門が残した古文書約1万1500点を分析し、「工楽家文書調査報告書」としてまとめた。

(本田純一、大園正美)



工楽松右衛門の肖像画(兵庫県郷土偉人肖像写真集より。高砂市教委提供)

工楽松右衛門(1743~1812年)現在の高砂市高砂町東宮町に生まれた。神戸で船乗りになり、御影屋を名乗って海運業を営んだ。丈夫な木綿の帆布「松右衛門帆布」を発明し、帆布で港の整備にも取り組んだ。「工夫を業しむ」として幕臣から工楽の姓を与えられた。

工楽松右衛門の詳細な研究は進んでいなかったが2016年、工楽家が代々住んでいた家を市に寄贈。高砂市史編さん専門委員が、日本福祉大学の曲田浩和教授(日本近世史)らとともに古文書を調査した。報告書によると、松右衛門は幕府の命令により択捉島で港を開発。さらに高砂や函館(北海道)、鞆の浦(広島県)の計4カ所の港湾整備に携わった。鞆の浦

高砂市、古文書1万点調査 測量図を発見

松右衛門は海中の大石を船で運び、海底の土砂をさらう船も製造した。これらの技術を2代目松右衛門が受け継ぎ、島根から福岡県にかけて港湾4カ所で技術指導。2代にわたって全国の港湾整備に尽力した。

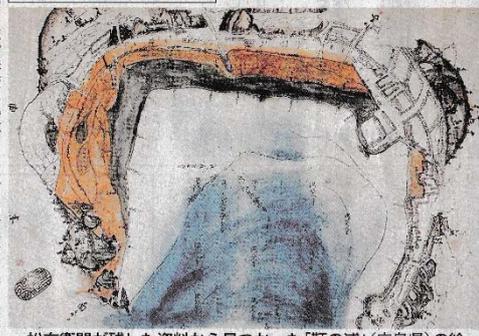
また、兵庫津(神戸市)で複数の大型船を所有。これらの船で北海道から肥料や木材を大阪に運び、大阪からは綿や砂糖などを運んで財を成した。高砂では造船にも取り組む。朝鮮半島から訪れる「朝鮮通信使」の船の建造にも携わった。

松右衛門は、高田屋嘉兵衛に先だって蝦夷地と交易。幕府領になる前の1794年から始め、1802

年、松右衛門は高砂に港を整備し、蝦夷―江戸間で幕府御用達の荷物を運んでいたという。函館では、船を維持管理する施設(ドック)を整備した後、土地の権利を高田屋に永代譲渡。高田屋の蝦夷地での活動の大きな支えになったとみられる。

市史編さん専門委員会の委員長を務める今井修平・神戸女子大教授(日本近世史)は「港湾整備の第一人者だったことが裏付けられた。大型船が入り出できる港を整備したことで物流量は増加。船の速度を高めた松右衛門帆布の発明と相まって、経済発展への功績は大きい」と話している。

報告書はA4判180ページ。兵庫県立図書館や高砂市、神戸、加古川の市立図書館で閲覧できる。



松右衛門が残した資料から見つかった「鞆の浦」(広島県)の絵地図の複製

工楽松右衛門（1代目、Wikipedia）

工楽 松右衛門（くらく まつえもん、寛保3年（1743年） - 文化9年8月21日（1812年9月26日））は、日本の江戸時代における発明家、実業家。

現在の兵庫県高砂市に生まれ、兵庫（現在の神戸市兵庫区）で廻船業を経営するかたわら、帆布（松右衛門帆）を発明し、築港工事を考案して、択捉島の埠頭や箱館のドックを築造した。これらの業績によって、日本の海運を支えた。高砂神社に松右衛門の銅像が建てられている。

高砂神社に建つ銅像



工楽邸 今は立派に復元されている



新聞記事には「藩の命を受け」とあるが、これは当時の姫路藩の家老・河合道臣（隼之助、寸翁）からの命を受け、ということである。書籍「河合寸翁」には、寸翁が手がけた一番最初の仕事として新聞記事を遡ること7年、1810年に高砂港を築くと記されている。

右の表は、その書籍「姫路藩の名家老河合寸翁 藩政改革と人材育成にかけた生涯」（熊田かよこ、2015年）よりの抜粋である。

表2 河合隼之助の藩政改革中に成った開発

和暦	西暦	新田・新浜・港	施工主
和暦7	1810	高砂港を築く	工楽松右衛門
文化11	1814	印南郡田包村に危張を築き始める	施主
文政元	1818	本場村、宇佐崎村の新浜見分 見積書を出させる	
文政2	1819	本場村新浜普請に着手、高砂新田開発、本場村新浜田開発	
文政3	1820	12月本場村に無利息五カ年賦銀649匁7分2厘を貸付	
文政4	1821	飾於津方成新田190町歩の普請始まる	伊保崎村庄屋中村五郎右衛門
文政7	1824	木場村新池底土掘場普請 費用66貫90匁	
文政8	1825	阿成村御新開（先代庄助の開発したそのさきへ）	浜田庄助
文政10	1827	木場川口波止普請、海堤を築村まで、仁寿山下に達する予定	
文政11	1828	的形村新開堀新田開発着手	浜田庄助
天保元	1830	下中島の新開地60町歩相生新田成る	
天保2	1831	伊保崎村加茂山堀ヶ分新築工事着手	中村五郎右衛門
天保3	1832	大塚村大保浜田23町歩着手	山本久左衛門
天保4	1833	加古郡新野辺村新田70町歩（全沢新田）開発に着手	砂部村市場屋九郎兵衛・高砂船頭町新屋吉兵衛
天保7	1836	伊保崎村新築成る 379間 1200匁	
天保9	1838	新郷場新田76町歩の開発着手 天保10年完成	砂部村全沢九郎兵衛・高砂船頭町新屋吉兵衛
天保10	1839	英賀兵河原新田11町歩開発 今在家村面積新田24町歩開発 御坊新田松原村万代新開16町6反常盤新開9町歩 岩本新開4町歩 八束新開9町6反 大森新田10町歩着手 英鹿村太平新田80町歩開発	英賀組大庄屋河野四郎右衛門等 印直郡船頭村榎屋利 淡本惣右衛門カ 下中島村大森源三 太物屋山本佐一郎 平福屋井上現右衛門

天保6年（1835）退職したが、卒するまでを記した（河合寸翁伝より）